

津波被害の教訓 後世に伝えよう

県庁でシンポ

東日本大震災を教訓に津波の歴史を学び後世に伝えようと、県は26日、「津波防災シンポジウム」歴史が伝える津波、歴史にしていく津波」を県庁で開いた。専門家の研究成果が報告され、約250人が熱心に耳を傾けた。

千葉工大惑星探査研究

市民約250人が参加した「津波防災シンポジウム」



センターの後藤和久上席研究員が、地質学を切り口に講演。津波による堆積物などの研究から、東日本大震災の大津波が、869年の貞観津波の再来と考えられるようになった経緯を説明した。

一方で、数年間隔で津波が発生すると、堆積物から津波の痕跡をとらえることが難しくなることを指摘。「次の大津波発

生が1000年後ということではない」と話し、警戒を続ける重要性を強調した。

東北大災害科学国際研究所の越村俊一教授は「2011年東北地方太平洋沖地震津波の被害と教訓」と題して講演し、被害の具体的事例から今後の防災の在り方を述べた。